

藤壺の里下がり

光源氏十八歳の春、北山で藤壺ゆかりの姫君（後の紫の上）を見いだして以来、光源氏は藤壺の代わりに、姫君を手もとにおいて心の慰めとしたいと願う。亡き母に代わり少女を養育する祖母の尼君に姫君引き取りを懇願するが、尼君は取り合わない。帰京後、正妻葵の上の冷淡な態度に、光源氏はますます姫君への思いを募らせ、また藤壺への秘めた思いに苦悩の日々を過ごすのであった。

藤壺宮、なやみ給ふことありて、まかで給へり。上のおぼつかながり嘆き聞こえ給ふ御気色も、いといとほしう見奉りながら、かかるをりだにと心もあくがれ惑ひて、いづくにもいづくにもまうで給はず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩き給ふ。

いかがたばかりけむ、いとわりなくて見奉るほどさへ、現とはおぼえぬぞわびしきや。宮もあさましかりしを思し出づるだに、世ととももの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、いと心憂くて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、さりとしてうちとけず心深う恥づかしげなる御もてなしなどのなほ人に似させ給はぬを、などかなのめなることだにうちまじり給はざりけむと、つらうさへぞ思さるる。

何ごとをかは聞こえつくし給はむ、暗部の山に宿もとらまほしげなれど、あやくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。

見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがなとむせかへり給ふさまも、さすがにいみじければ、

世がたりに人や伝へむたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても

思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。命婦の君ぞ、御直衣などはかき集めて来たる。

殿におはして、泣き寝に臥し暮らし給ひつ。御文なども、例の、御覧じ入れぬよしのみあれば、常のことながらも、つらういみじう思しほれて、内裏へも参らで二、三日籠りおはすれば、また、いかなるにかと御心動かせ給ふべかめるも、恐ろしうのみおぼえ給ふ。

宮も、なほいと心憂き身なりけりと申し嘆くに、なやましきさまさり給ひて、とく参り給ふべき御使ひしきれど思しも立たず。まことに御心地例のやうにもおはしまさぬはいかなるにかと、人知れず思すこともありければ、心憂く、いかならむとのみ思し乱る。暑きほどはいとど起きも上がり給はず。三月になり給へば、いととしるきほどにて、人々見奉りとがむるに、あさましき御宿世のほど心憂し。人は思ひよらぬことなれば、この月まで奏せさせ給はざりけるこ

とと驚き聞こゆ。わが御心ひとつには、しるう思し分くこともありけり。御湯殿などにも親しう仕うまつりて、何ごとの御気色をもしるく見奉り知れる御乳母子の弁、命婦などぞ、あやしと思へど、かたみに言ひあはすべきにあらねば、なほのがれがたかりける御宿世をぞ、命婦はあさましと思ふ。内裏には御物の怪の紛れにて、とみに気色なうおはしましけるやうにぞ奏しけむかし。見る人もさのみ思ひけり。いとどあはれに限りなう思されて、御使ひなどの隙なきもそら恐ろしう、ものを思すこと隙なし。

中将の君も、おどろおどろしうさま異なる夢を見給ひて、合はする者を召して問はせ給へば、及びなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。「その中に違ひ目ありて、つつしませ給ふべきことなむ侍る。」と言ふに、わづらはしくおぼえて、「みづからの夢にはあらず、人の御事を語るなり。この夢合ふまで、また人にまねぶな。」とのたまひて、心の中には、いかなることならむと思しわたるに、この女宮の御事聞き給ひて、もしさるやうもやと思しあはせ給ふに、いとどしくいみじき言の葉尽くし聞こえ給へど、命婦も思ふに、いとむくつけうわづらはしさまさりて、さらにたばかるべき方なし。はかなき一行の御返りのたまさかなりしも絶えはてにたり。

(若紫)

光源氏は、藤壺懐妊後もせつない思いを訴えるが、返事も絶えてしまった。一方、北山の尼君が病死し、姫君の父兵部卿宮（藤壺の兄）が姫君を引き取ろうとするが、光源氏はその直前に姫君を自邸に連れ去ってしまう。

翌年二月、藤壺は無事皇子を出産する。桐壺帝は、光源氏に生き写しのその男皇子（後の冷泉帝）の誕生をことのほか喜ぶが、藤壺は恐ろしさにおののくばかりであった。

【口語訳】

藤壺宮は、おからだの具合がお悪いことがあって、(宮中より)退出なさった。(桐壺)帝が心配に思いお嘆き申し上げなさるご様子も、(光源氏は)とてもお気の毒だと拝見するものの、せめてこのような機会にでも(藤壺宮にお逢いたい)と、心もうわの空に迷って、全くどこにもお伺いにならず、宮中でも自邸でも、昼は所在なくもの思いにふけて過ごし、夕暮れ時になると王命婦を追いかけ回して(藤壺宮のそばに手引きをせよと)迫り続けなさる。

(王命婦は)どのように策をめぐらしたのだろうか、なんとも理不尽に(光源氏が藤壺宮に)お逢い申し上げるその間までも、(光源氏には)逢瀬が現実とは思われないのが、やるせなくつらいことであるよ。藤壺宮も、(かつての二人の)意外で嘆かわしいできごと(逢瀬)を思い出しなさるのでさえ、いつも頭から離れることのないもの思いの種であるのに、せめて(二人のことは)あの事だけで終わりにしようと思いいなっていたのに、(再びの逢瀬に)とても情けなく、ひどくつらそうなお様子であるものの、親しみ深く可憐で、かといって(光源氏に)心を許すでもなく、思慮深く(こちらが気後れするほど)立派な御物腰などがやはり普通の人と似ていらつしやらないのを、どうしてせめて不足な点だけでも混じっていらつしやらなかつたのだろうか、(光源氏は)恨めしいとまで自然とお思いいなる。

何ごとを(一夜で)申し上げ尽くしなさるだろうか、(申し上げ尽くすことなどできようはずはなく)夜明けを知らぬ暗部の山に宿も取りたそうであるが、あいにくの(夏の)短夜なので、あきれほど嘆かわしくかえって逢わぬがましな逢瀬である。

(このように)お逢いしてもまたお目にかかれる夜はめつたにない、(はかない)夢のような逢瀬ですので、その夢の中にそのまま消えてしまうわが身であればなあ。

と(光源氏が涙に)むせかえりなさる様子も、やはりひどくいじらしいので、

世間の語り草として、のちのちまで人が語り伝えるのではないのでしょうか。(このように)類のないほどつらいわが身を、醒めることのない夢のものにしまして。

(藤壺宮が)思い乱れていらつしやる様子も、至極もつとも恐れ多いことである。命婦の君が、(源氏の)御直衣などをかき集めて持って来た。

二条院にお戻りになって、(光源氏は)泣きながら寝てお暮らしになった。お手紙なども、(藤壺宮は)いつものようにご覧にならないという旨があるだけなので、いつものことながらも、(光源氏は藤壺宮が)恨めしくひどく茫然となさって、宮中へも参上しないで、二、三日籠っていらつしやるので、また、どういうことなのかと(帝が)ご心配なさるに違いないようなものも、恐ろしいとばかりお思いにならずにいられない。

藤壺宮も、やはりとても情けないわが身であったよと思いいなくなり、気分が悪さも募りなかって、(帝から)早く参内なさるようにとのご使者が頻繁であるけれどご決心もおつきにならない。本当にご気分がいつものようでもおありでないのはどうしたことだろうかと、心ひそかに思い当たられることがあったので、情けなく、どうなることだろうとばかり思い乱れていらつしやる。暑いころはいっそう(具合が悪く、)起き上がることもなさらない。(妊娠)三か月におなりなので、たいそうはつきりとわかるころで、女房たちが拝見して不審がるので、(藤壺宮は)驚きあきれられるほどの前世からの御宿縁が情けなく思われる。人は(光源氏との密通は)思いもよらないことなので、この月まで(帝にご懐妊を)奏上なさらなかつたことよと意外に存じ上げる。(藤壺宮)ご自身の心だけには、はつきりとおわかりになることもあった。ご入浴などにも身近にお仕え申し上げて、どんなご様子をもはつきりと拝見し知っている御乳母子の弁と、王命婦などは、不可解なことだと思うけれど、互いに話し合うべきことではないので、やはり逃れることのできなかつた(光源氏と藤壺宮との)前世からのご宿縁を、王命婦は驚きあきれたことだと思う。帝には物の怪によるご病氣にとり紛れたため、すぐに懐妊の兆候とおわかりでなくいらつしやったというように奏上したのであろうよ。(藤壺宮の)女房たちもそうとばかり思っていた。(帝は藤壺宮を)ますますいとおしくこの上ないものと思われなかって、(お見舞いの)使者などが絶え間なくあるのも(藤壺宮は)それ恐ろしく、もの思いなさることは絶え間ない。

中将の君も、ただごとでない異様な夢を御覧になって、夢占いをする者をお呼びになりお尋ねになると、あり得ぬような御想像もつかぬ内容のことを占った。「そのご運勢の中に意に反する事態があつて、ご自身慎まねばならないことがございます。」と言うので、めんどろなごと思われて、「自分の夢ではない、ある方の御覧になつた夢のことを語るのだ。この夢が現実になるまで、他に誰にも話してはいけない。」とおつしやって、心の中では、どういふことなのであろうかと思ひ続けなさつているところに、藤壺宮の(ご懐妊の)ことをお聞きになつて、もしやあの夢はそういうことでもあろうかと思ひ合わせなさるので、(光源氏は)ますますせつない言葉を尽くして(藤壺宮に)申し上げなさるが、王命婦も

考えてみるに、（今回の事態が）まことに恐ろしく、困ったことになったという思いが募って、まったく取り計らいようもない。ほんの一行の（藤壺宮からの）ご返事がたまにはあったのさえも、すっかり絶え果ててしまった。